

「お父さん」と税金

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属中学校3年 中村 嶺治

「お父さんがいるってどんな気持ち？」

これは私が小学生の時に母にした質問である。私は「お父さん」という存在を小学校入学まで知らなかった。入学式の時に周りの友達には父親や母親がいるのにも関わらず、私には「お父さん」がいなかったのが初めて不思議に思った。私の質問に対し母は

「お父さんがいたら、ほっとして温かい気持ちになるよ。」

と答えた。その時の私には、母の言っていることの意味がよく分からなかった。

私の父は、私が一歳、兄が四歳の時に心不全で急死した。当時、母は働いていなかったため、子供が二人いる状態で突然世帯収入が無くなった。また、その一年後、兄が病気を発症し、手術が必要になった。ひとり親家庭等医療助成制度という制度があったおかげで、収入がなかった当時でも兄は適切に手術を受けることが出来た。もし、この制度がなかったら、兄と一緒に生活をした思い出も存在しなかったかもしれない。ひとり親家庭等医療助成制度にて扱われる助成金の財源は主に税金である。税金は私たちの生活だけでなく、兄の命も助けてくれた。

母はよく、

「お父さんが働いている時にきちんと税金や年金を納めていてくれたから、今のあなた達は勉強や習い事をしたり、楽しく生活することができているのだよ。」

と言っている。真面目な父は税金や年金をきちんと納めてくれていた。父のように、責任を果たすことは未来の人達へ繋がるのだと感じた。今回、父と税金の関係について調べていくうちに、私たち家族は遺族年金という遺族のための年金を受け取っていることを知った。そして遺族年金は非課税の年金であることも知った。税金は基本的に国民全員が納めなければならないものであるが、このように困っている人に寄り添った制度もあるのだとわかった。

日本に住む人たちや、生前に父がきちんと税金や年金を納めてくれたからこそ、私たち家族は救われ、今の自分がいるのだと思う。私には父の記憶はないが、今回税金について色々と調べたことをきっかけに、父の存在を身近に感じた。小学生の時の私には父がいたらどんな気持ちになれるのか分からなかったが、「お父さん」がいたから安心して生活することができたという温かい気持ちを知ることができた。税金はひとり親世帯だけを支えているわけではなく、日本に住む全員の今と未来をも保証してくれている。だからこそ、税金を納めることは自分や他人の生活を支えるだけでなく、未来の生活までも保証される、とても大切なことであると感じた。私が今までに受けた恩恵の恩返しのためにも、今後も一生懸命勉強し、社会に出た時は生前の父のように納税し、社会全体を支えられる大人になりたい。